

牛と人の幸せのものさし ～牛の幸せを測り、酪農家の幸せを語る～

新潟大学 農学部 農業生産科学科 4年 高橋 若菜

私の夢は、牛の幸せと人間の幸せを両立させることである。

私は新潟大学農学部に入學するまで、酪農に関わったことはなかった。酪農に関する大学の講義や実習は学ぶこと全てが新鮮で、今まで消費者として一方的にしか見えていなかった酪農業を、様々な角度から見る事ができるようになった。ある講義で、私は「カウコンフォート」という概念を初めて知った。「カウコンフォート」とは、「乳牛の快適性」と和訳され、飼養環境を乳牛にとってストレスのない快適なものとする概念である。この概念によって、私がそれまで持っていた、工場のような、集約的な畜産物生産のイメージは覆された。更に驚いたことは、「カウコンフォート」は、乳牛飼養上の一観点にとどまるのではなく、学術的に多くのテーマで研究されているという点だった。それまでの私は、家畜を「可哀想だ」と思う気持ちと、「家畜の飼養環境をより良いものとする」と混同して考えていた。しかし、「カウコンフォート」とは、ただ単純に牛が可哀想だから遵守しなければならないものではなかった。「カウコンフォート」の結果として、乳牛の生産性も向上するという事実を知った時、牛にとってだけでなく、酪農家にとっても利益のある概念が存在することに酪農の未来に対して希望を感じた。私は、大学生活を通してこのテーマを追求したいと強く思うようになった。

新潟大学農学部附属フィールド科学研究センターには、乳牛が飼養され、広大な牧草地が広がっている。大学で「カウコンフォート」の研究をするのに、最も適した場所であると思い、研究室を希望した。幼い頃から動物が好きな私にとっては、多くの牛たちに囲まれて過ごすことは勿論、実際に乳牛を用いて自分のやりたい研究ができるのはとても魅力的である。

私は現在、「カウコンフォート」を軸に、二つのテーマで研究を行っている。一つ目は、「ビデオカメラを利用した分娩房における分娩牛の行動観察と快適性の評価」というテーマである。分娩房の床の材質をマットまたは砂にし、分娩する牛の様子を24時間連続で行動観察する。古く固くなった牛床用のゴムマットを敷いた分娩房では、母牛は足を滑らせて転倒したり、横臥や起立を躊躇うような動作が多く見られた。しかし分娩房の牛床に砂を敷くと、母牛は転倒することなく自分の好きな時に起立や横臥をすることができた。このことから、牛床の材質を変えるだけで、分娩牛の行動がスムーズになって、ストレスを軽減するだけでなく、転倒などの事故が起こるリスクを減らせるのではないかと考えている。二つ目は、「乳牛における簡易な暑熱ストレス軽減法の開発」というテーマで、暑熱環境下で、乳牛に冷やした飼料を与える研究を行っている。乳牛は暑さに弱く、特に日本の夏のような高温多湿の環境では、食欲低下やそれに伴う乳量の低下、

更には受胎率の低下などが問題となっており、酪農家の経営に深刻な影響を与えている。

そこで私が着目したのは、乳牛のルーメン内の異常な発酵熱を抑制することによって、夏季でも乳牛の食欲は低下することなく維持できるのではないかという点だ。現在、この試験は進行中で、今年の秋に結果が出せる。採食量が増加して暑熱ストレスによる乳量の低下を抑えることが最も望ましいが、仮にそのような結果が得られなかったとしても、そこに繋がるかもしれない兆しを少しでも見出だし、次はそこを掘り下げて研究をすればいい。顕著な結果を出すことを絶対目標にするのではなく、私は「カウコンフォート」の向上を目指して諦めずにひたむきに牛と向かい合いたい。

だが実際に牛の幸せを実現することはとても難しい。私は自分の卒論研究を通して、いつもそれを痛感している。毎日牛舎に通うようになってわかったことがいくつもある。牛には一頭一頭個性がある。すぐに私の存在に慣れた牛もいれば、いつまでたっても私を警戒する牛もいる。たくさん草を食べる牛もいれば、食の細い牛もいる。同じ種類の牧草でも、葉茎の比率や香り、乾燥具合や発酵具合などによって、牛は喜んで食べる日もあれば、全く口を付けないで水や唾液でびしょびしょに濡らしたり、下敷きにしてベッドにしてしまったりする日もある。急に飼料を全然食べなくなって、第四胃変位という病気になった牛を見た。毎日段々と採食量が減っていき、乳量が健康時の半分程に落ちていくのをただ見ることしか出来なかったのは本当に心苦しかった。牛に辛い思いをさせてしまって、私の研究の意味はあるのだろうかと思んだが、ただ考えるだけでは答えは出なかった。今は、毎日牛の気持ちになって牛の様子を観察することを心がけながら、自分の研究を精一杯やり遂げることで、その答えを出したいと考えている。

牛の飼い方に、型にはまった正解はない。一軒一軒の酪農家が試行錯誤を繰り返して、その土地、その環境、その牛にあった飼育をしている。飼料に力を入れている酪農家もいれば、繁殖に力を入れている酪農家もいる。乳牛の快適性に興味を持つ酪農家もいれば、生産性の向上を追求する酪農家もいる。そんな当たり前のことに気付かされたのは、今年の2月に新潟県畜産協会が主催した畜産経営改善セミナーに参加した時だった。そこで行われた優秀畜産表彰会で数々の賞を受賞された酪農家さんがしてくださった講演をよく覚えている。その酪農家さんは、牛床の敷料におがくずを使っており、毎日こまめに交換することによって乳房炎の減少に成功したという報告をされた。私自身、分娩房の床の材質についての研究をしていたこともあり、その講演の内容自体がとても興味深かったのだが、それよりも、そのセミナーに参加していた他の酪農関係者と思われる人たちが、その講演内容を時にはメモをしながら、真剣な表情で聴いていることに衝撃を受けた。「牛の飼い方に正解はないんだ。酪農のプロでも、皆試行錯誤を重ねて、情報を集めて、私と同じように日々勉強しているんだ」と思った瞬間だった。その瞬間から、学生の私にも

酪農の発展に寄与できることがまだまだたくさんあるのではないかと考えるようになった。

私にとって酪農の発展とは、人と牛が両方幸せになるような酪農を実現させることだ。牛の快適性ばかりを追求して酪農家の精神的・経済的な重荷になってもいけない。乳牛が経済動物だということは覆らない事実である。しかし、家畜が快適に過ごすことによって経済性が向上することも事実なのだから、両者にとって最もバランスがよく、より良い関係が作れるはずである。私の夢は、「カウコンフォート」の概念に沿って伸び伸びと育った牛が高く評価され、市場に並ぶ乳製品にも付加価値が付き、消費者がそういった取り組みを理解してくれるような未来を作ることである。生産者の理念が消費者の共感を得られるような、地域に根差した心の通った酪農を、私は夢見ている。だから私は「カウコンフォート」を学んで、牛の幸せを測れるようになり、そして更に牛を飼う人、牛乳を飲む人の幸せを諮れる人間になりたい。